

## 図書館にて

教授 藤 嶽 明 信  
(真宗学)

### ◆存るべからざる在り方において在る衆生

大谷大学真宗学科に入学したのは1972年である。そのとき旧図書館(1961年竣工)はキャンパスの中央に位置していた。一般閲覧室は、次の授業までの空き時間などに、何かと利用しやすい空間であった。けれども図書館の図書を積極的に活用していたというわけではなかった。期末に受講科目の試験レポートを書くために調べ物をしたような気はするが、その程度の利用であった。

しかし4回生のときに、図書館で『宿業と大悲』(廣瀬杲著)を借りたことはよく覚えている。この本の存在は下宿先の先輩を通して知った。先輩が学内書店の本棚から抜き出して、「これはいい本だから、購入しておいたらいいよ」と紹介してくれた。何時か買えばよいと思っているうちに本は売り切れ、在庫もないと店主に告げられた。

どうしても読みたいと思い、図書館から借りた。読み始めてみると、内容や文章表現に引きつけられた。そこで、印象深い箇所だけは抜き書きをしようと大学ノートに書き写し始めたが、前後の流れもあって、その箇所だけというわけにはいかなかった。結果的に相当量をノートに書き写した。このような読書の仕方をしたのは初めてであった。今ならコピーををすると思うが、当時は真面目に書写した。それは思いの外よい勉強になったし、いまだに印象に残っている。



書き写した文章のなかでもことに引きつけられた文章があった。それは、如来は「存るべからざる在り方において在る衆生」を発見した、このような文章であった。そして「如来が、外に在るべき存在として衆生を見出すのではなく、あくまでも在り得べからざる存在として、自らの智内に照摂する」と述べられていた。如来によって衆生が哀れまれ、慈悲をかけられて救われていく。そんな風に漠然と思っていた私にとっては、真宗における衆生観(人間観)や如来観について、再考を促される文章であった。

刺激を受けた文章なので、卒業論文にも引用した。そうしたら口述試問の時に、「存るべからざる在り方において在る」とはどういう意味なのですかと質問された。私の返答を聞きながら審査の先生は、よく理解してから引用しましょうね、という表情をしておられた。このような経緯もあって、『宿業と大悲』の本と「存るべからざる在り方において在る衆生」という文章は、旧図書館と密接に結びついて思い出される事柄である。

## ◆経教は鏡のごとし

現在の図書館を含む「真宗総合学術センター 響流館」は、2001 年に竣工した。閉架式でカードによって図書を検索しなければならなかった旧図書館に比べると、開架式の現在の図書館は圧倒的に利用しやすい。1 階と 2 階の閲覧室では現物を見ながら図書を探すことや、内容の吟味も直ぐさま行える。また書名や著者名などの一部分からデータベース検索が可能である。このことは曖昧な書名や著者名では本を探すことができなかった旧図書館に比較すると格段の差である。

地下書庫は、入庫の手続きは要るものの、可動式の書架を操作しながら図書を手にとって閲覧できる。あるとき真宗連合学会の機関誌『真宗研究』を調べたいと思って地下の書庫へ入った。『真宗研究』の論文執筆者、また編集後記や彙報などを順番に読むことによって、真宗連合学会発足の経緯や、開催場所、開催日数、また開催内容や方法にも変遷があることが分かって随分興味深いものがあった。継続して発行された機関誌や雑誌などは大部のものもある。そのような資料を、発刊順に見ていたり、また飛ばし読みをしながら閲覧することで分かってくることもあって興味深い。

地下書庫や 2 階閲覧室では、親鸞や法然や善導関係の図書、また雑誌掲載論文などを探したことが多い。このなかの善導は、親鸞が尊敬した 7 人の先達（七祖）の 1 人である。また法然の師に当たる人物である。それゆえ大谷大学のみならず佛教大学図書館にも善導関係の図書は多く、何度か利用させてもらった。しかしながら佛教大学にはあるけれども大谷大学にはない図書もあるし、またその逆

の場合もある。図書館にもそれぞれ個性があって面白い。

善導の著述（「序分義」）のなかに、佛の教えを学ぶ意義について述べた言葉がある。「経教は之を喩ふるに鏡の如し、しばしば読みしばしば尋ねれば、智慧を開発す。若し智慧の眼開けぬれば、即ち能く苦を厭ひて涅槃等を欣樂する」。文意は次のようなことである。經典の教はこれを喩えていうと鏡のようである。たびたび読み、たびたび尋ねたならば、智慧が開ける。もし智慧の眼が開けたならば、よく迷いの苦を厭い、涅槃の樂を欣うのである。

ここでは教えが鏡に喩えられている。曇っている鏡でも、根気よく磨くならば曇りが取れて、明らかに物事を写し出すようになる。このことは裏から考えるならば、粘り強く磨き続けなければ、曇りは晴れないし、物事が不明になっていくことを示唆しているといえよう。善導のこの喩えは、直接的には経教について述べたものであるが、図書館所蔵のさまざまな図書に向かい合うときにも思い出される言葉である。